

非常勤講師による生徒理解及び生徒理解手段としての「B7法」の検討

理科 田川 健太

1 はじめに

総合学科では、普通科をはじめとする従来の学科よりも多様な選択科目を開設するために、より多くの教員や教室が必要になる。筑波大学附属坂戸高等学校（以下、本校という。）においても総合科学科という学科名の総合学科を平成6年度から開設したが、それに伴い科目数が飛躍的に増大した。しかし、それに伴う定員増はほとんどなく、その不足分を非常勤講師で補うことになった。本校の場合、従来週当たり40時間程度であった非常勤講師時間が、総合学科においては200時間前後にまで増加した。

しかし、高等学校における非常勤講師は、採用待ちの教員志望者や大学院生がほとんどで、彼等がいかに真面目に勤務しようとも、採用条件の不遇さや経験不足からくる教員としての力量不足は覆いようもなく、授業内容の質の低下をもたらす場合もないわけではない¹⁾。

他方、生徒をとりまく激しい社会の変化の中で、その行動様式は複雑化し、価値意識も多様化している。表面的な生徒の行動が、そのまま生徒の内面の素直な表現であるとは限らず、教科指導をはじめとするあらゆる生徒指導において困難を来している。生徒指導の根源は生徒理解であり、生徒理解なしに、生徒の内面に深くくい込む指導は行い得ない。また、生徒は自分が十分に理解されていると感ずるとき、教師への信頼を確かなものとし、その指導を心から受け入れるのである²⁾。

よって、専ら教科指導を行う非常勤講師においても、その授業の中で生徒を理解することは必要不可欠である。また、非常勤講師は比較的年齢が若いことが多いので、正規教員よりも生徒に感性が近く、生徒理解がしやすいという可能性を秘めていると考えられる。しかし、時間的制約や先に述べた経験不足から、十分な生徒理解ができていないのが現状であると考えられる。

よって本稿では、教育活動の一貫としての生徒理解に的を絞って、非常勤講師による生徒理解の現状及び可能性を検討するとともに、筆者自身が非常勤講師として勤務する中で開発した「B7法」を紹介するとともに、その検討を行う。

2 非常勤講師による生徒理解の現状及び可能性

2-1 非常勤講師に対する調査

非常勤講師が生徒理解に対してどのような考えをもっているかを明らかにするために、本校に勤務する非常勤講師に対して聞き取りまたはアンケート調査を行った。

2-1-1 方法

聞き取り調査は、以下の4項目について行った。また、直接の聞き取りが不可能な場合はアンケート形式で、聞き取りと同じ内容について自由記述を得た。

- 非常勤講師として生徒を指導する際に、どの程度生徒理解が必要であると考えるか。
- 実際に、どの程度生徒について理解できているか。
- 非常勤講師という立場上、生徒理解が困難であると感じたことがあるか。
- その他、生徒理解について考えることがあるか。

2-1-2 結果

上記の調査の結果をまとめると、以下の通りであった。

- 非常勤講師としての生徒理解の必要性
生徒理解の必要性はすべての非常勤講師が認めていた。またその中身は、興味・関心の所在、学習のスピードについてが主たるものであった。
- 実際の生徒理解の度合い
具体的な回答は少なかったが、授業中に生徒をよく見ながら少しずつ理解しようとしているという回答が比較的多く見られた。
- 生徒理解が困難である点
どの回答でも、生徒と接する時間の少なさが挙げられていた。日常会話を交わす機会が少なく、しっかりと生徒を理解するに至るのは難しいとする回答が多かった。
- その他

授業だけでは生徒理解は十分になされず、他の教員（教諭）と連絡をとったり、生徒と話す時間をできるだけとって、自分から動いていく必要があるという回答があった。また、これらは結局授業にも活かされるのではないかとする意見もあった。

2-1-3 考察

以上の回答を総合すると、非常勤講師は、生徒理解の

必要性を感じながらも、授業以外で生徒と接する機会が少なく、生徒と接する時間を取る工夫をしながらも、生徒理解は不十分であると感じている様子が伺える。

また、どの非常勤講師も、生徒理解への努力を怠っていない様子はなく、効果的な方法が示されれば、積極的な生徒理解への行動がなされると考えられる。

2-2 非常勤講師による生徒理解の可能性

様々な問題を抱えるとされる非常勤講師ではあるが、常勤教員とは違う特徴を生徒理解に役立てることはできないか、筆者の経験をもとに検討する。

2-2-1 生徒理解の観点

従来から教師はさまざまな意識的或いは無意識的な方法で生徒理解をしてきた。その方法は、次の3つ観点から分類される³⁾。

a. 主観的理解

生徒との日常的なふれあいの中で、教師が直感的に受けとめる理解、いわゆる「カン」である。実践現場ではもっとも原初的な方法でありながら、生徒指導上決定的な意味を持つことが多い。

b. 客観的理解

生徒の生活背景、交友関係の現状を調査・分析し、また、心理検査・適性検査を用いる等、各種の情報をもとに理解を深めていく方法である。質問紙によるものに限らず、日常の態度（話すときの仕草、目線、癖など）を観察し分析することも重要である。

c. 共感的理解

生徒の立場に立ち、許容的に理解する教育相談的な方法であり、教師と生徒との人間的な深いかかわりを作っていく上で、もっとも大切な方法である。

これらの立場からの生徒理解は、教師がそれぞれ独自の工夫と努力によって個別に行われてきた。しかし、年次会や教科などの教員組織を通じて、教員それぞれが個別に得た生徒理解の結果を、共有し、多角的に理解することが必要である。

2-2-2 非常勤講師による生徒理解の可能性

先に述べたように、非常勤講師は、採用待ちの教員志望者や大学院生がほとんどであるため、教師としての経験が重要視される主観的理解については大きな期待はできない。しかし、客観的理解については、その方法を工夫し、分析に時間を割けば経験十分とは言えない非常勤講師でも十分な効果が上げられると考えられる。また、比較的年齢が若いことから、共感的理解についてはより大きな期待ができる。偏った理解にならぬよう、常勤教

員との密な情報交換によって、より効果的な組織的生徒理解が期待される。

非常勤講師は、一般的に授業以外の校務分掌を割り当てられない。従って、常勤教員に比べ拘束される時間少ない。よって、授業以外で生徒と直接接する機会を多く持つことができ、また、生徒理解に費やす時間も多く持てると考えられる。

しかし、同じ日に他校との掛け持ちがあったり、学校以外の仕事を持っていたりすると、なかなか時間がとれないようである。また、本校では、非常勤講師の給与は授業時間に対して支払われるので、授業以外で生徒と接する動機づけがなされない可能性もある。このような問題に対しては、非常勤講師各自の努力姿勢に期待するほかない。

非常勤講師は常勤教員に比べ生徒と関わる時間を多くとれる可能性を持っており、この可能性を十分生かせるように、具体的方策を開発することが必要である。

3 生徒理解手段としてのB7法の検討

前項で述べたように、具体的な生徒理解の方策があれば、非常勤講師による生徒理解は組織的な生徒理解の一環として大きな効果があると考えられる。その方策の一つとして筆者が非常勤講師として勤務した中で開発したB7法を紹介し、その結果を検討する。

3-1 B7法とは

本稿でいうB7法とは、毎時授業の始めに、生徒にB7(128.5×91mm)の白紙カード(葉半紙)を配布し、生徒に自由記述をさせ、毎時授業の終わりに回収し、その記述をもとに生徒の理解を図ろうとするものである(図1)。

生徒に記述させる際、授業日と氏名を必ず記述するよう指示した上で、それ意外は何を記述しても良い旨を教示した。逆に言えば、授業日・氏名以外は何も書かなくても良いことになる。もれなく用紙を回収するため、「出欠の確認を兼ねている」と伝えた。

なお、この方法は、筑波大学教育学系の渡邊光雄教授が、その講義の中で受講学生に対して実践されていたものをヒントに開発したものである。

3-2 実施に際しての留意点

このB7法を実施するに当たって、以下の点に特に留意した。

a. 白紙を用いる

このB7法は、何も記述（印刷）されていない全くの白紙を用いる。他の生徒理解の手段として氏名を記入する欄を設けたり、罫線がある用紙を使用する場合があるが、生徒の完全な自由記述を促すため、あえて白紙を用いた。

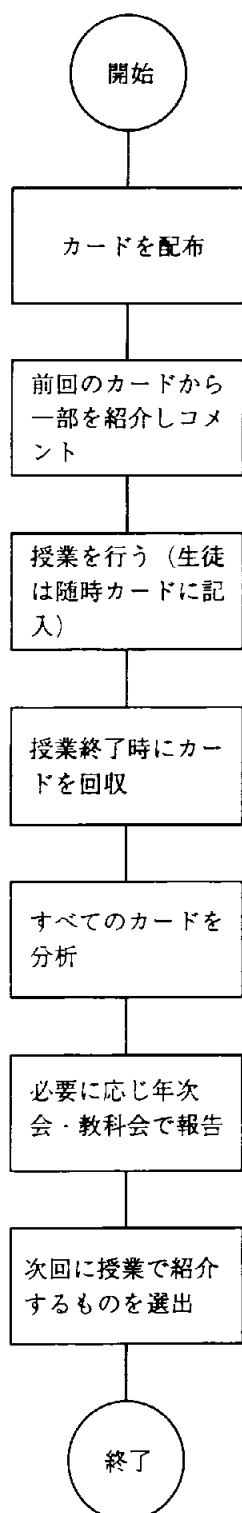


図1 B7法のフローチャート

また、試し刷りや印刷ミスなどのために生じた裏紙を使用することも考えたが、生徒がその裏面を気につけ、自由記述を妨げる可能性があるのもったいない気がするが、あえて両面が白い用紙を用いた。

b. B7の用紙を用いる

自由記述させるために、様々な大きさの用紙を試したが、この大きさが最適であった。これより小さければ十分な記述が出来ず、欲求不満となる。また、これより大きいと、用紙を持って余し、余白を残すことの抵抗感（未達成感）が生じる。

c. 生徒と双方向コミュニケーションをとる

授業中（概ね授業のはじめ）に、その用紙の一部を口頭で紹介し、コメントをつける。このことにより、生徒に対し、書いたことは教師によって読まれる、すなわち理解されるという安心感を与える。さらに、その内容に対し適宜コメントすることで、教師と会話することが苦手である生徒とのコミュニケーションがはかれる。また、生徒全員の前で発表することで、授業或いはその他の様々な事象に対する多様な捉え方を全員で共有することができる。

d. 秘密を守る・評定に影響しない

その書かれたことに対する匿名性は絶対に守らなければならない。或いは、全員に知らせないほうが良いと考えられるもの（家庭の事情や身体的なことなど）は、発表しない。これらを守らなければ、生徒の自由記述は保証されない。また、学習成績の評価（評定）には一切影響しないことを生徒に伝えることも、自由記述を阻害しないために重要である。

3-3 カードの分析

B7法による生徒理解の根幹をなすのが、回収したカードの分析である。

分析に当たっては、記述内容を直接的に解釈する方法と、記述から投影される心理を分析し間接的に解釈する、2つの方法がある。

a. 直接的解釈

カードに文章によって記述がなされている場合、その内容を直接的に読みとることができる。

図2の生徒（1年生女子）は、現在の興味・関心が異性に向けられていることが伺える。同様の記述が他の女子生徒のカードにも多数見られ、クラス全体の雰囲気として、異性の交際相手を獲得することが流行していることが伺える。

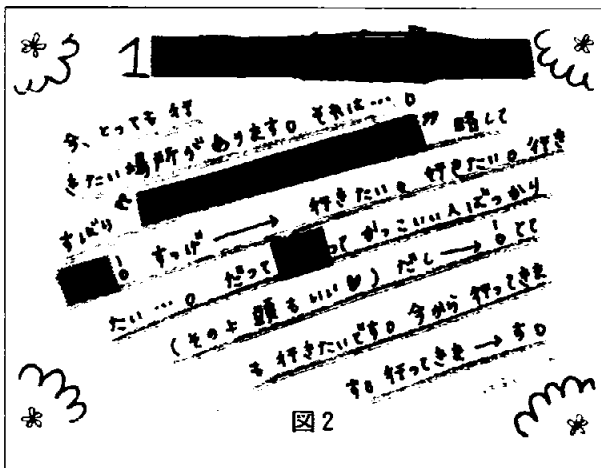


図2

図3の生徒（1年生女子）は、毎回ほとんど自然現象に関する質問を書いており、その内容は授業内容と関連があるとは限らない。よって、この生徒は自然科学に対して広い関心を持っていることが伺える。

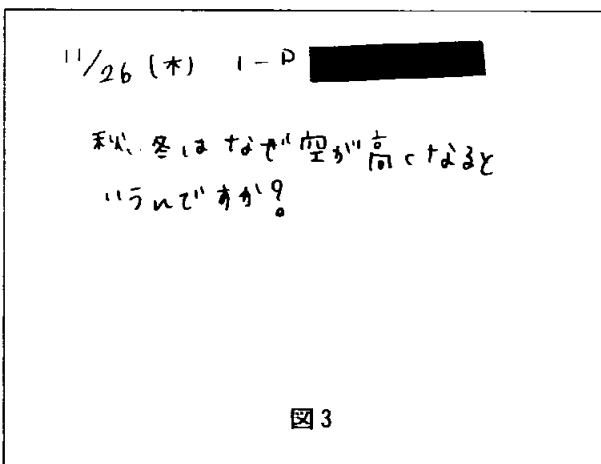


図3

図4の生徒（1年生男子）は、毎回競馬に関することを書いている。15歳という年齢で競馬に関心がある生徒は少なく、趣味の会話として競馬の話を生徒間ですることは困難であろう。筆者も競馬に関心があることを示すと、生徒の方からよく話しかけてくるようになった。競馬の話の“ついで”に学校生活や進路のことなどを話している。

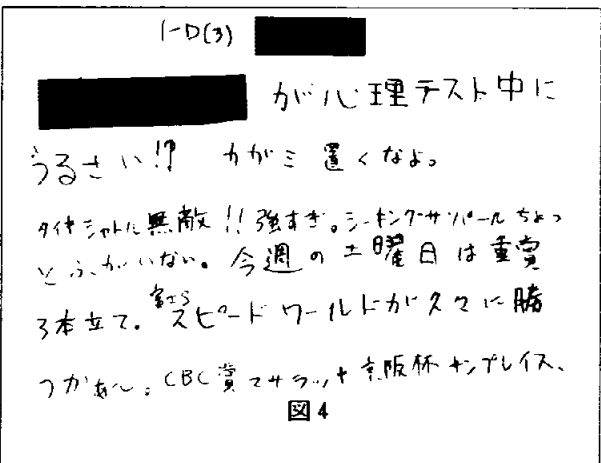


図4

以上のように、カードの内容を直接的に読みとり理解することは、最も簡単であり、かつ生徒理解において重要な要素を得ることが出来る。

b. 間接的解釈

カードに文章の記述がなかったり、あるいは文章の記述がある場合でも、その表面的内容をそのまま捉えるのではなく、投影された裏面にあることを心理学的に分析し理解することができる。この間接的理解のもととなる理論には描画心理学などが挙げられるが、さらにフロイトらの精神分析論を基盤とする方が都合がよい。精神分析論は守備範囲が広く、他の様々な心理学派の基礎となっており、多かれ少なかれそれぞれに影響を与えているものである⁴⁾。また、カードの画面を構成することから、ゲシュタルト心理学の観点も参考になると思われる。

図5の生徒（1年生女子）は、毎回ほとんど上端に氏名を書くのみで、まれにその下に語句を記すことがある。氏名のみを書く生徒は他にもいるが、図6（1年生女子）のようにカードの中央部に書くものがほとんどである。描画心理学において上下の位置関係は意識・無意識を表し、上は意識的、下は無意識的な意味を持つ（図7）。図5の生徒は自己表現が意識側に偏っており、し

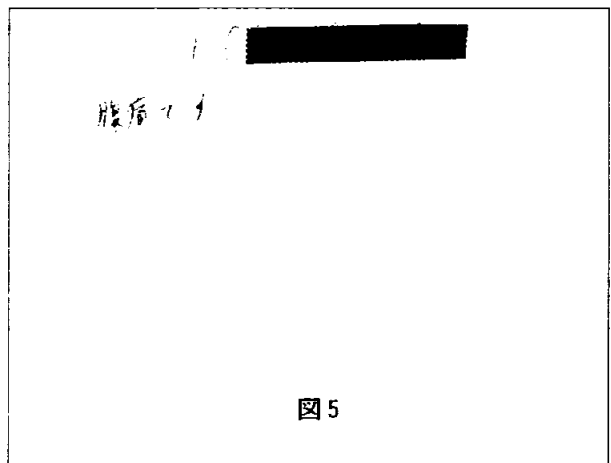


図5

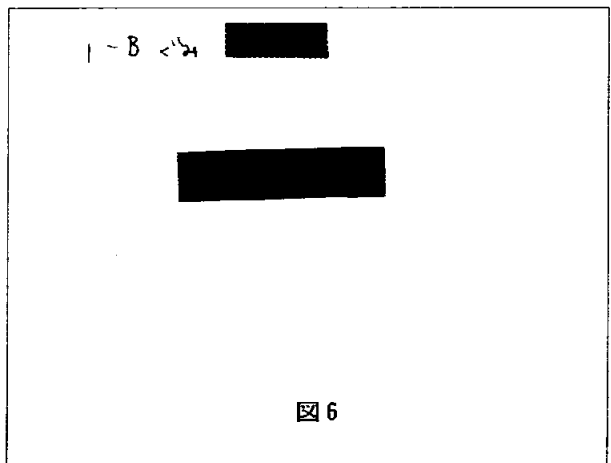
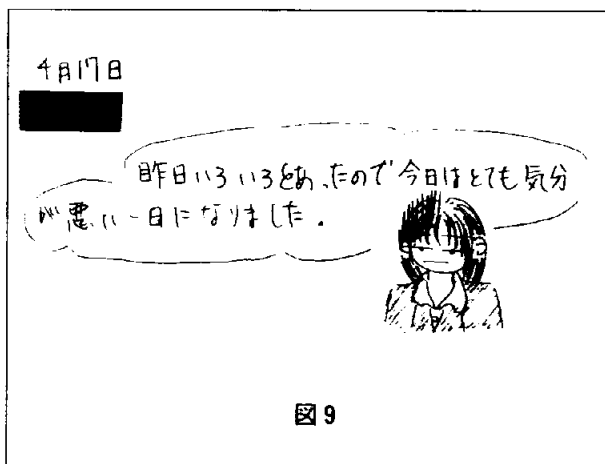
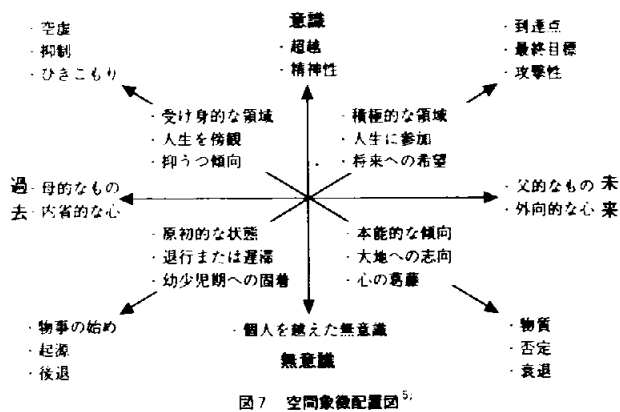


図6



かも小さい。この生徒は精神性が高く、いわゆる“おとな”である。しかし、それを支える無意識の安定感がない。この生徒が書いた学級日誌には、「買い物リスト」が毎回書かれており、家事の手伝いが心の中でかなり大きな部分を占めていると考えられる。家事は自分の家庭における役割であると認識している反面、無意識で自分

の不遇さを理解してもらいたいと思っているようである。

図8の生徒（1年生女子）はよく人の顔を描くが、これは自画像であると捉えられる。図9も同一生徒によるものであるが、その日の状態によって表情に変化が見られる。どのカードも配置のバランスがよく、比較的安定した心理状態にあるといえる。

このような間接的理解は、各種投影法による心理テスト（ロールシャッハテスト、バウムテストなど）に似る。従って、一般的にその解釈には熟練を要し、よって、経験の浅い非常勤講師にはここまでの解釈は差し控えるべきであり、仮に解釈をしても、それをもとにした具体的な指導をとるのは避けるべきである。

3-4 情報の共有

このように、B7という小さなカードから生徒についての様々な情報が得られる。しかし、偏った主観的な解釈になりがちであることから、教員1人だけで解釈するのではなく、年次会など生徒をとりまく教員集団において情報を共有し、複数の視点で解釈をするのが効果的であると考えられる。

また、教員各々がこのB7法を用いて生徒理解を図ろうとすれば、生徒は授業ごとにカードへの記述を要求され、生徒にとって負担となってしまふ。よって、年次会の中で特定の教員が代表して行い、その結果を年次会構成全教員で共有するのが良い方法であると思われる。

4 おわりに

今回紹介したB7法は、筆者はあくまで生徒理解の補助的方法であると捉えている。この方法のみで生徒の全てが理解できるはずはなく、生徒との様々な関わり合いの中で理解を深めていくことが肝要である。しかし、生徒と接する時間がとれなかったり、あるいは直接的接触による生徒理解がまだ未熟である非常勤講師においては、とても有効な方法であると考えられる。非常勤講師と常勤教員とが密に連絡を取り合い、総合的な生徒理解を図るのに、このB7法は大きな効果を発揮するであろう。

この方法では、解釈の仕方に多くの可能性が存在する。具体的な解釈の方法についての更なる研究が、より効果的な生徒理解のツールとして発展させるであろう。

参考文献

- 1) 服部次郎(1997)：『総合学科改編の成果と課題－中高一貫制総合学科への展望－』研究成果報告書「総合学科における教育課程及び単位制による教育課程の編成・実践の在り方」、筑波大学附属坂戸高等学校、pp. 6-39
- 2) 唐澤勇・富田初代(1995)：『教師の専門性を高める担任学』学事出版、p. 60
- 3) 唐澤勇・富田初代(1995)：前掲書、p. 61
- 4) 國分康孝(1980)：『カウンセリングの理論』誠信書房、p. 38
- 5) 金盛浦子(1995)：『絵で判る子どもの心のバランス』青樹社、p. 115